

6/24 朝日

平和願う 問う 沖縄 慰靈の日



慰靈の日の朝、沖縄戦の激戦地に残るガマには、手を合わせる人の姿があった—23日午前8時34分、沖縄県糸満市、藤脇正真撮影

沖縄は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦犠牲者を悼む「慰靈の日」を迎えた。沖縄県糸満市の県

沖縄は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦犠牲者を悼む「慰靈の日」を迎えた。沖縄県糸満市の県

沖縄は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦犠牲者を悼む「慰靈の日」を迎えた。沖縄県糸満市の県

防衛力強化が示されたとして、「奇烈な地上戦の記憶と相まって、県民の間に大きな不安を生じさせており、対話による平和外交が求められる」と述べた。

▼4面=平和宣言の要旨、35面=平和の詩

岸田文雄首相も参列し、「今、我が國を取り巻く安全保障環境は、戦後最も厳しく、複雑な状況にあるが、世界の誰もが平和で心豊かに暮らせる世の中を実現する」などとあいさつした。

78年前の沖縄戦では、日本米合戦で20万人余りが亡くなった。6月23日は、旧日本軍の組織的な戦闘が終わった日とされる。公園内の「平和の礎」には犠牲者の名前が敵味方の区別なく刻まれ、早朝から訪れた人々が手を合わせた。

(編集委員)

辺野古移設 今年も語らず

慰靈の日 首相、「強い経済」強調

岸田文雄首相は23日、沖縄県を訪れ、沖縄戦の犠牲者を悼む「沖縄戦没者追悼式」に参列した。首相はあいさつで「強い沖縄経済」の実現をめざす決意を示した一方で、昨年に続き、米軍普天間飛行場（宣

野湾市）の名護市辺野古移設問題には言及しなかった。

▼1面参照

首相は沖縄経渉が着実に成長しているとしながらも、「一人当たり県民所得の面上や子供の貧困、コロナ禍からの觀光業の復興

私たちが重視している平和と繁栄は、命を落とした方々の犠牲と沖縄の歩んだ苦難の歴史上有ります。沖縄戦から28年が経った今、いかにも改めて深く胸に刻み、戦争の惨禍を二度と繰り返さないよう強く決意のも、静かにいづれを垂れたいと思います。

昨年、沖縄復帰から50年の節目を迎、改正沖縄振興特別措置法に基づく新たな沖縄振興がスタートしました。しかししながら、1人当たり県民所得の向上・子供の貧困の解消などの課題がなお存在しているほか、コロナ禍からの觀光業の復興や物

など、新たな課題にも直面している」と指摘。沖縄の文化や伝統など独自の魅力や優位性があるとし「課題を確実に解決し、『強い沖縄経済』が実現されるよう国家戦略として取り組む」と訴えた。

沖縄に集中する米軍基地問題については、「在日米軍施設・区域の整理・統合・縮小を進め、国に見える成果を一つ一つ着実に積み上げ、基地負担の軽減に全力で取り組む」と述べた。

追悼式終了後、首相は基

地負担軽減について、「結果を一つ一つ出していく。

これが何よりも求められて

いる」と感じており、努力を

続けたい」と記者団に語った。

一方、玉城千尋知事は「平和宣言」で、全国の米軍専用施設の約7割が沖縄に集中し、航空機の騒音や

玉城知事の平和宣言（要旨）

今から78年前、沖縄で一般住民を巻き込んだ悲惨な地上戦が繰り広げられました。昨年12月に閣議決定された「国家安全保障戦略」などにおいては、沖縄における防衛力強化に関する記憶と相まって、県民の間に大きな不安を生じさせており、対話による平和外交が求められています。

アジア太平洋地域における関係国等による平和的な外交と対話による緊張緩和と信頼醸成、そしてそれを支える県民・国民の理解と行動が、これまで以上に必要になってきています。

戦争の悲惨な体験をいかに教訓、次世代へ伝承していくかが私たちの使命やいひーん。

We sincerely believe that it is our noble mission to bear witness to the painful lessons from the countless war experiences and to pass on these messages to future generations.

◆しまくとらは(沖縄の言葉)・英語の意訳 戦争体験者からの未来への教訓を次の世代へ伝えていくことは私たちの使命です。

岸田首相のおこづち（要旨）

（西原市）の名護市辺野古移設問題には言及しなかった。

首相は沖縄経済が着実に成長しているとしながらも、「一人当たり県民所得の面上や子供の貧困、コロナ禍からの觀光業の復興

私たちが重視している平和と繁栄は、命を落とした方々の犠牲と沖縄の歩んだ苦難の歴史上有ります。沖縄戦から28年が経った今、いかにも改めて深く胸に刻み、戦争の惨禍を二度と繰り返さないよう強く決意のも、静かにいづれを垂れたいと思います。

昨年、沖縄復帰から50年の節目を迎、改正沖縄振興特別措置法に基づく新たな沖縄振興がスタートしました。しかししながら、1人当たり県民所得の向上・子供の貧困の解消などの課題がなお存在しているほか、コロナ禍からの觀光業の復興や物

など、新たな課題にも直面している」と指摘。沖縄の文化や伝統など独自の魅力や優位性があるとし「課題を確実に解決し、『強い沖

縄経済』が実現されるよう国家戦略として取り組む」と訴えた。

沖縄に集中する米軍基地問題については、「在日米軍施設・区域の整理・統合・縮小を進め、国に見える

成果を一つ一つ着実に積み上げ、基地負担の軽減に全

力で取り組む」と述べた。

（川邊義典、小野太郎）

事故、水や土壤の環境汚染など、県民生活にさまざまな影響が及んでいる現状に

言及。米軍普天間飛行場の名護市辺野古への移設計画の断念などを求めた。

政府が南西諸島の防衛力を強化、平和の構築をさらに醸成、平和の構築をさらに

たのはうなづけで、首相が相のあこづちを聞いて改めて強く思った」と語った。

玉城氏は式典に先立ち、糸満市内で首相と面会し

た。玉城氏によると、「引退する県民のみなさん

に抱つてもらっている負担を軽減するよう努力したい」と述べたところ。

沖縄の情勢は、米軍基地の集中による大きな負担を抱つていただいている。政府として、このことを重く受け止めています。引き続き、在日米軍施設・区域の整理・統合・縮小を進めるため取り組んでまいります。

沖縄の情勢は、米軍基地の集中による大きな負担を抱つていただいている。政府として、このことを重く受け止めています。引き続き、在日米軍施設・区域の整理・統合・縮小を進めるため取り組んでまいります。

このことを重く受け止めています。引き続き、在日米軍施設・区域の整理・統合・縮小を進めるため取り組んでまいります。

（川邊義典、小野太郎）

「むごい沖縄戦」声あげ続ける

6/24/2012



船舶の機器等の修理等で手を合わせる
加賀たおる2日、那須市、藤崎正風撮影

自衛隊増強 重なる記憶

戦後78年の「憲兵の日」を迎えた沖縄では、日、儀式着を脱み、平和を祈る行事が各地で行われた。沖縄での防衛力強化をめぐり、「玉城トニー」知事が平和宣言で「昔古以来の地上戦の記憶」と繰り返したのと同様に、沖縄戦に動員された元学生の悲愴感を示した。激戦地・宮古島の「平和の壁」を築かれた遺族らは、戦争の惨劇を一度も繰り返さないといい、改めて願った。

られた県内全25校の出席者
らでつくる「元金寧隊の会」は今年1月、声明を
発表。沖縄を含む南西諸島で進む自衛隊の増強に
ついて、「再び戦争が迫
りくる恐怖と強い危機感
を覚え、むしろ沖縄戦を
思い出す」立場を示
し、再び沖縄を戦場にす
る」と強く反対した。
上原さんと面会。「私
たちの力では軍拡を止め
られないかもしない。
でも、いくつどなつとも

平和を訴え続ける
海をのぞむ那覇市の公園では、戦時中に沈没させられた船船の犠牲者の慰靈祭が営まれた。
慰靈祭とは、石垣島に住む山里節子さん(85)がメッセージを寄せた。43年12月、兄の山里秀雄さん(当時15)は、今年航船の船頭を務めるため那覇から鹿児島の船に乗り、新たに海上に刻銘された姉・米子さん(当時の名前)のねえ。那覇市の知念栄一さん(84)は23日、今年の誕生日を前に手を合わせ、乗った。米子の無理な死を受け、同業者約800人ともじめたくなった。石垣島には今年も月、陸上自衛隊駐屯地が開設された。市民は密賀し、住民の賛否は割れている。山里さんは「悲惨な沖縄戦体験者である私たちはが、一度と戦争は起こさせないと声を大にすること」と語えた。(伊藤和行)

語りかけた。パンか手を手に時折、涙をぬぐつた。「姉さんの生きた跡し、もう残せた」栄一さんは、戦前に現在の那覇市蘭島で酒屋を営んでいた一家の9人きょうだいの末っ子。生まれてから母を「やした」。45年4月、戦火が激しくなると、知念さん一家は本島南部を避け蘭つた。その途中、米子町では焼夷弾の破片が頭に当たって、即死した。

栄一さんはその後、一家族とさぶれ、父や祖母とは「一度と会えなかつた。戦後は孤児院に入り、「母ほんじて」と娘上の姉の監督で「再会」した。この日、栄一さんは一緒に穂を訪れた政子さんが(9)は米子さんを思い起こし、「触っても全然動かない」と置いていくしかなかった。ついで「しかもうた」と歌を詠みさせた。

祖母の涙 17歳が詩

沖縄全戦没者追悼式では、那覇市のつくば開成国際高校3年生、平賀名秋さん(17)が「平和の詩」を読み上げた。祖母の涙を見て感じた沖縄の「チムグクル(真心)」を詩にした。



私達と同じように
娘っぽを駆け回り
友達とおしゃべりをする
みんなで暖かいご飯を食べ
時には泣き
時には笑い
時には「ありがとう」を伝える
そんな今と変わらない日常が
平和が
そこにはあった
平和は不確かで
脆く崩れやすい
いつもすぐそばにあるのに
いつのまにか消えていく
ねばの涙は
塵文仁の丘に永遠に灯る平和
の火は
今、私達に聞いかける

七十八年前の あの日	今、私達に聞いかける
あの時	平和とは何かを
かけがえのない	私達に出来ることは何かを
たったひとつの命が	私は過去から学び
憎しみと悲しみの中で	そして未来へと繋り継いでい
戦っていった	きたい
名も無き赤子の 涙かな	おばゝの涙を
微かな泣き声は	沖縄の想いを
震える母の手によって	かけがえのない人達を
冷たく光の無いガマの中で	決して失いたくはないから
僅く消えていった	今日も時は過ぎていく
幾多もの砲彈が	いつもと変わらずに
船橋の海を黒く染める炎の嵐	先人達が創いてきた平和を
となって	次は私達が創りでいこう
この島に歸り注いだ	そして世界に届けていきたい
戦争が起きる前	平和を創り
そこには日常があった	守っていく
	この沖縄の「チムグクル」を